



阿波の北方といわれる吉野川流域の農村は、日本最大の藍作地帯として知られていました。その起源は平安時代の初期に、荒妙という布地を織っていた阿波忌部氏が栽培したのだという伝承があります。最古の資料は宝治元年(1247)に町内の見性寺を開基した翠桂和尚が、そのころ寺のあった美馬郡岩倉(脇町)の寺地染

葉(藍)を栽培し、衣を染めたことを記した『見性寺記録』です。その後藍作は下流域一帯にひろがり、文安2年(1445)には大量の葉藍が阿波から兵庫の港に荷揚げされたことが、『兵庫北関入船納帳』に記録されています。

戦国時代までの阿波では、葉藍を水に漬けて染め液をつくる沈殿藍の技術しかなかったのですが、天文18年(1549)に三好義賢が上方から青屋四郎兵衛を呼び寄せ、すくもを使った染めをはじめ、またすくもの製法を伝えたので、やがてこの地が全国的な藍の大産地となっていったのです。

(「みよしき」による)

藍住町歴史館 藍の館 展示室



▲江戸時代小紋の訪問着



▲大正期の藍染めうぶ着



▲元禄時代作品文化財



▲幕末木綿染と藍入花瓶



▲東寝床藍染体験場



▲明治20年 建築書院造琵琶床



▼東門と馬屋



▼母屋 = 買付け客の応接室



来て、見て、のある町 あいずみ

藍商屋敷 【旧奥村家】

文化5年(1808)建築の母屋をはじめ、3棟の寝床(藍加工場)や贅をつくした西座敷に、阿波藍商の隆盛を偲ぶことができる。東寝床の藍栽培のプロセス展示を見、藍染めに挑戦することで、あなたも藍のもつロマンに魅せられることだろう。優れた藍色を伝承した伝統ある天然藍で藍染が体験できます。(団体予約あり)



▲東寝床 = 藍栽培の展示場



▲母屋 = みせは商談の部屋



▲大門 = 徳島城の古財で建てる



▲母屋 = 番頭の執務室

▲西座敷中庭

▼西座敷 = すばらしい欄間

藍の館

苗とり



種まきから75日を経過した4月中旬が下旬に苗代から抜き取って本畑に移植する。昔は麦をつくっていたので、麦の間に移植していた。

移植



こうすると、麦が風よけ、日よけの役割を果たしてくれるので好都合。いまは麦を作らないので、作業を1ヵ月おくらせている。

麦刈り



畑は藍だけになる。麦株をあいがきを牛馬にひかせて十分に整地する。その後は土寄せが大切な作業となる。



麦刈りの7~10日あと、肥料を根元によく施す。肥料はにしん粕・豆粕・かりん酸石灰・チリ硝石・硫酸アンモニア・人糞尿・諸魚粕などを使用していた。

お水取り



毎年水害で灌がい施設が流されたため、藍畑に井戸を掘り、水を汲み上げて、一面にひろげて灌水をした。

藍葉刈り



7月下旬から8月下旬にかけて葉藍を収穫した。1反の藍畑に男2人、女3人ほどで作業をした。夏の暑い作業。

夜切り



収穫した葉藍は、その夜のうちに1cmほどに切り刻んだ。朝まで置くと葉が乾燥するので徹夜の作業となった。そのためこの作業を夜切りといった。

寝せ込み



9月になると、寝床に保存してある藍を俵から出し、山積みしながら水を打つ。4~5日もすると発酵して摂氏65~70度の高温となる。寝床はアンモニア臭が立ちこめ、目も開けていられないほどである。

きりかえし



一つの山を一床という。そこに積んだ葉藍が万遍に発酵するように、20回ほど移動する。切り返しという重労働が100日ほどつづく。

ふとんかけ



染の仕上げが近づくと、むしろで葉藍を覆い(ふとんかけ)平温の状態になるのを待つ。そうすると染が12月初旬に出来あがる。

すくも



むしろをはずすと、水分を含んだ染は団子状になっているので、とおしておろし、染がいたまないように手入れをすくと、もう商品としての染は仕上げとなる。

俵づめ



染が出来あがると、俵に詰め(60kg)で保存する。いまは染を溶解して染め液をつくるが、むかしは藍玉にして出荷した。ただ筑前売りは染のまま積み出されていた。

藍大市



12月の徳島で開かれた藍大市は、藍の品評会でもあり、全国から来た問屋の商人たちとの大商いの場であった。

玉つき



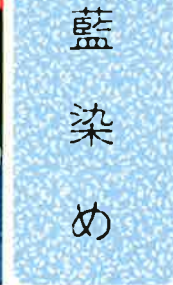
藍の商談がまとまると、藍商たちは、景気よく玉搗きをして藍玉に仕上げ、いよいよ出荷の準備に大いそがしとなった。玉搗きは庭一面に木臼を出し、一人一臼で伊勢音頭の歌に合わせて景気よく搗く。

出荷



多くの藍商たちは新町川畔に藍倉をもち、一時保管しておいて、別宮港や津田港とか撫養港まで小舟で小出しし、廻船によって藩外の市場に出荷した。

藍染め



染は水に溶解しないので、灰汁(アルカリ液)で液状とする。その水面にコバルト色の泡(藍の華)が立つと染められる状態になる。

藍だて



染め



藍染めは藍液中のインディゴホワイトを附着させるが、それを空気中に出し十分酸化させないと発色しない。こうして染めと酸化を何度かくり返しながら染め上げる。

乾燥



染め上げた糸や綿布は、十分に水洗いしたあと、乾燥させた。藍は殺菌力が強いので、古くから兵衣や農良着にはとくに重宝がられた。